

1. 歌詞

作詩者ノウルズ・ショー (Knowles Shaw, 1834-78) は、オハイオ州モーガン・タウンシップのニューロンドン近郊に生まれました。両親ともにスコットランド系でした。幼少期をインディアナ州ラッシュ郡で過ごし、そこでバイオリンを弾き始め、多くの舞踏会の音楽を担当するうちに回心し、後にバプテスト派の牧師となり、1855年1月11日、マーサ・フィンリー嬢と結婚しました。牧師となつてからは、主に西部と南部で活動し、その素晴らしい歌唱力から「歌う伝道師」と呼ばれました。その後、彼は作曲と作詞を始め、5冊の歌曲集を出版しました。1874年(40歳)、彼自身が農民として体験した収穫前の苦勞と収穫の喜びを基に、"Bringing in the Sheaves" の歌詞と曲(※現在では後述するジョージ・A・マイナーが1880年に書いたメロディで歌われています)が出版されましたが、彼の最後の作品の一つとなりました。1878年、テキサス州ダラスで五週間祝された伝道を終えて次の町に向かう途上、鉄道事故により死亡したからです。

2. メロディー

その鉄道事故からおおよそ二年後、ジョージ・マイナー (George A. Minor, 1845-1904) が、ショーの歌に新曲「Sheaves」(穀物の束)をつけました。

彼は、ヴァージニア州リッチモンドのバプテスト教会の熱心な信徒で、日曜学校の校長を努めながら讃美歌を指導し、日曜学校の讃美歌もいくつか作曲しました。ピアノと楽譜の販売業者であるヒューム・マイナー社と、ピアノ製造業者であるメイソン・ハムリン社に勤務したこと、それ以外は殆ど知られていません。

3. 日本語訳者

松本(のち永井)ゑい子 (1866-1928) は、明治改元 (1868年) の二年前に千葉県で生まれました。父が江戸で和漢の学を修め、母が和歌をたしなんだこともあり、子供の頃から書道、和歌、四書五経を学び、父の友人であった津田仙(津田塾大学の創設者津田梅子の父)を頼って上京し、「三田救世学校」(のちに「築地海岸女学校」。青山女学校の前身)で学びました。

英語歌詞の翻訳について彼女はこう語っています。

「英語の楽譜に日本語を当てはめることは容易なことでは有りませんでした。原詩の調子の高き処は日本語も強き言葉を用ひ、低き処には弱き言葉を用ひ、又重々しい処には之に応じた日本語を用ひねばなりません。又英語の歌句の長短により日本語の方も同様に調節せねばなりません。原詩の大体の意味、即ち悲喜慶弔等の場合によって、それぞれに適応した字句を選ばなければなりません。」「讃美歌は将来幾十万の人に歌はれ、記憶され、人の感情上に多大の影響を及ぼすのである、之は容易の仕事でないと云う責任感に充ち満ちてゐました。」

参考文献 梅染信夫『讃美歌物語2 頌むべきかな』新教出版社、1994年11月20日、P.113-115

4. 雑記

この讃美歌の繰り返し部は、『大草原の小さな家』という「古き良きアメリカの開拓時代の様々な困難を乗り越える家族の姿を通して、家族愛や人間愛の尊さを描く不朽の名作の中で頻繁に歌われています。

参考 URL: <https://www2.nhk.or.jp/archives/articles/?id=C0010353>

アメリカでは1974年～83年まで放送され、日本でも大ヒット。2025年8月時点でNHK BS4で放映中。

この讃美歌は、日本や韓国では唱歌になるほど愛された曲ですが、現在英米ではあまり歌われないそうです。